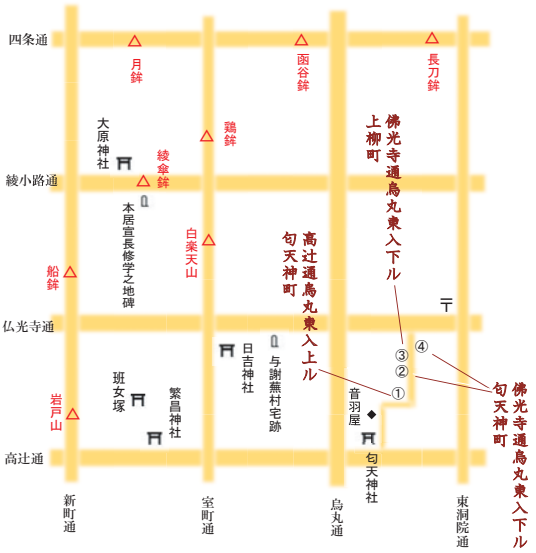
第9回　下京ビジネス街の旧跡（一）

■ 大原神社と綾傘鉾

今回は、四条烏丸の交差点から、南に広がる一角を巡ってみましょう。このあたり、とくに交差点の西南の区域は、ビジネス街のため、古い家屋は少ないので、残念ながら仁丹の町名看板はほとんど残っていません。

まず、大原神社（綾小路通新町東入ル善長寺町）を訪ねましょう。駒札によると、「弘仁三年に嵯峨天皇の勅命により、綾小路通室町西入ルの善長寺境内に勧請。善長寺（立江地蔵尊）は、豊臣秀吉の京都改造のときに、寺町蛸薬師下ル（新京極）に移転したが、大原神社は旧地（現在の地）に残存。社殿は、天明の大火で焼失、寛政三年再建。元治元年のどんどん焼で再び焼失、慶応元年再建」。所在地の町名「善長寺町」は、善長寺がここにあったときの名残です。

『都名所図会』巻之二には「大原社は綾小路新町の東にあり、祭る所伊弉冊尊なり。丹州桑田郡大原社と同神なり。」とあります。丹州桑田郡大原社とは、福知山市三和町（平成十八年に京都府桑田郡三和町は福知山市と合併）の大原神社のことで、伊弉冊尊〔伊邪那美尊〕は女神であることから、三和町の大原神社は安産と五穀豊穣の神様として有名。三和町の大原神社のお札を京都の大原神社で販売するなどの交流が江戸時代にはあったと伝えられています。三百年近く途絶えていましたが、近年、両者の交流が復活しているようです。



仁丹町名看板の所在（室町の四条から高辺まで）

祇園祭のときには、大原神社のある善長寺町に、綾傘鉾（綾小路室町西入ル善長寺町）が建ちます。綾傘鉾は、どんどん焼（一八六四年、元治元年）のときに焼失。一時徒歩巡行として復興していたこともあったそうですが、明治十七年〔一八八四年〕を最

大原神社

後に長くとだえていました。昭和四八年〔一九七三年〕に大原神社を拠点にして、棒振り囃子として復活。囃し方は、壬生衆（壬生六歳念仏で有名）。綾傘が完成した昭和五四年〔一九七九年〕より山鉾巡行に参加しています。祇園祭のときに、どんどん焼で焼ける前の綾傘鉾の模型が会所に飾られますが、旧に復する日を切望している善長寺町内の熱意が伝わってきます。

■　本居宣長修学の地

本居宣長〔一七三〇～一八〇一〕は、宝暦二年〔一七五二年〕から七年〔一七五七年〕まで京都に遊学しました。宣長の二三歳から二八歳の間です。この遊学の間、儒学を堀景山、医学を武川幸順に学びました。寄寓していた堀景山宅の跡に「本居宣長先生修学之地」の碑（室町通綾小路西入善長寺町）が建てられています。所在地でわかるように、大原神社と同じ町内、斜め向かいのビルディングの入口広場の側壁にあります。

「本居宣長先生修学之地」の碑

京都遊学の間の出来事は、宣長自身が『在京日記』（『本居宣長全集』第十六巻〔筑摩書房、一九七四〕所載。http://www.norinagakinenkan.com/nenpu/に概略が載せられています）に詳しく書いています。本居宣長の京都遊学の間の勉学は、非常に密度の高いものでした。以下に、主なものを書き上げますが、実に精力的に活動しています。

宝暦二年〔一七五二年〕には、『易経』、『詩経』、『書経』、『礼

記』の素読、『史記』、『晋書』の会読（雑誌会の形式の読み合わせ）、『左伝』の堀蘭沢による講釈を聴講。新玉津島神社の月次和歌会にも出席しています（本シリーズ第5回参照）。書名を単に列挙するのも芸のない話ですが、当時の教科がどんなものであったかがわかります。今日の大学の教科とは、まったく異なっていますね。

その合い間に、祇園祭の山鉾見物「七日（宝暦二年六月七日、一七五二年七月十七日）、於二四条境町東一観二祇園会山鉾一、四条河原での納涼「十日、夜遊レ于二四条河原一。納涼之諸子続レ踵、燈燭映レ水戯鼓響レ空。天下無双之美観也。」、紅葉狩「三日（十月三日、一七五二年十一月八日）、与二貞次、藤伯一行一梅尾、槇尾、高尾一、観二紅葉一、詠二和歌一矣」、十月九日には芝居見物、十月十六日には、藤森神社の馬場で乗馬、ついで東福寺の通天橋で紅葉狩。

翌宝暦三年〔一七五三年〕には、『世説新語』、『左伝』、『蒙求』の会読。二月十一日（一九五三年三月十五日）には、藤森で乗馬後、小栗栖野で梅花見物。七月二二日（一九五三年八月二十日）には、堀元厚〔一六八六～一七五四〕に入門、『霊枢』などの医書の講釈を聴講し始めています。

宝暦四年〔一七五四年〕に堀元厚が死去したため、武川幸順〔一七二五～一七八〇〕に入門し、その塾（室町四条の南）に寄宿しました。武川幸順は、京都で代々小児科を営んでおり、修行ののち、本居宣長も小児科を専門とするようになりました。この年、名を宣長と改め、いよいよ医者としての身を立てることになります。この間も、景山塾での研鑽も続けています。

宝暦五年〔一七五五年〕には、『漢書』、『荘子』の会読。武川幸順による『本草綱目』などの会読。

宝暦六年〔一七五六年〕には、『南子』、『荀子』、『列子』の会読。息抜きも忘れず、七月十六日（一九五六年八月十一日）大文字送り火見物のあと、夜に木屋町の景山を訪ねています。七月二四日（一九五六年八月十九日）には地蔵盆の記事。十二月二九日（一九五七年二月十七日）祇園に遊び、おけら詣りを見物。

翌宝暦七年〔一七五七年〕の十月三日（一七五七年十一月十四日）に、京都遊学を終え、帰国のため出立。奈良、伊賀を経て、十月六日に松坂に帰着。

本居宣長が学んだ漢籍は、漢方の医学書を読むためという目的だけではなく、かなり広範囲の分野を網羅しています。「漢籍」と一くくりにしても、実際には独立した教科書ですから、若い頃にたたきこまなければ、身につかない。このような基礎の上に、本居宣長の「国学」の業績があるという事実は厳粛です。学ぶときには、それが将来の基礎になるかどうかわからないこと、基礎がないところで、いくら方法論（ノウハウ）を勉強しても実りはないこと。昨今は基礎鍛錬をないがしろにして、ノウハウを効率のよく教育（勉強）することが横行していますね。もっとも、研究者や学者を養成することは、教育のごく一部ですが。

この石碑のほかに、「鈴屋大人偶講学旧地」の碑が烏丸通四条下ル東側長刀鉾町（東京三菱銀行内）にあるそうです（本居宣長は、鈴屋と号した）。上述の碑からは東側にずれているので、根拠があったのかどうかは不明です（全くの当て推量ですが、堀元厚の塾跡である可能性もあります）。

本居宣長の京都遊学の十年ほどのち、明和五年〔一七六八年〕に、『平安人物誌』という京都の学者、書家、画家などの人名録が刊行されました。『在京日記』に出てくる堀蘭沢（堀景山の子）と武川幸順は、本居宣長より少し年長ですが、すで一家を成しており、それぞれ儒学、医学を教えていました。明和五年〔一七六八年〕の版には、二人の名前が学者の分類のところに載っております。

屈　正亮　字　号蘭澤　綾小路室町西へ入町　堀正太夫

武川順　字建徳号南山　室町四条下ル丁　武川幸順

『平安人物誌』は、当時の文化人名録ですが、読者の側からいうと、京都遊学の師匠を選ぶための案内書とも言うべき書物です。強いて現在に引き直すと、大学案内にあたるものです。当時は、今日のような大学はありませんから、幕府や藩が作っていた学校や宗門の学舎以外では、学者や僧侶の個人的な塾が主体であったと考えられます。『平安人物誌』の刊行は「京都に学者先生が集まっていたために、遊学の目的地になっていたこと」を示しています。本居宣長の例にあるように、「遊」も「学」も堪能できますからね。このような書物が刊行される背景には、好学の風を受け入れる社会の成熟があったのでしょう。

■　与謝蕪村終焉の地

与謝蕪村（一七一六～一七八三）は、俳人、文人画家。蕉門十哲の一人榎本其角の弟子、夜半亭早野巴人に師事。巴人が死んだあと、約十年間放浪。四二歳のとき京都に居をかまえ、島原の角屋で俳諧を教えるなど、京都を中心に活躍。明和七年〔一七七〇年〕五五歳のときに、夜半亭二世を継ぎ、蕉風の復興を唱えつつ、独自の境地を切り開きました。安永三年〔一七七四年〕五九歳のときに、仏光寺通烏丸西入ル南側釘隠町の路地奥に居を構えたとされています。天明三年〔一七八三年〕この地で死去。墓所は、一乗寺の金福寺。最後の居所に、「与謝蕪村宅址（終焉之地）」の碑。この碑は、比較的新しく、平成十年に建てたもの。

「与謝蕪村宅址（終焉之地）」の碑

「釘隠町」という町名も面白い。この町に十四倉屋（とよくらや？）という豪商が住んでおり、屋敷の長押に商家にはめずらしく釘隠しを用いたことに由来すると伝えられています。釘隠しの「隠し」は蕪村の句によく出てくる「冬籠」に通じるようで、これまた面白い。さしずめ、「釘」は蕪村で、「釘隠し」はこの釘隠町の路地。

桃原の路次の細さよ冬ごもり　蕪村

『蕪村自筆句帳』〔尾形仂編著、筑摩書房、一九七四〕七五五

「桃原」は桃源のこと。この句は釘隠町に越してくる前に詠んでいるようですが、釘隠町での最晩年を暗示するような句になっています。釘隠町に移ってからの蕪村の活躍はめざましく、隠しても釘はしっかりと効いています。『蕪村自筆句帳』の蕪村年譜によれば、夜半亭の月並句会を毎月開催するとともに、弟子の几薫の開催する几薫菴会にも出座し、その間に吟行をこなすなど。安永八年〔一七七九年〕六四歳のときには、蕪村を宗匠、几薫を会頭とする俳諧修行の学校「檀林会」の結社。

按ずるに、蕪村にとって「冬ごもり」とは、ほかからの影響をいったんは絶って、自分の世界を創造すること。それかあらぬか、冬ごもりとはいいながら、桃源郷に遊ぶように自在に俳諧の道を進めております。蕪村の齢六十を越えてからの活躍は、思わずわが身のおそまつさと引き比べてしまいます。すこしは、爪の垢でも煎じて飲まなければいけませんね。

ここからは、高校の古文の時間を思い出ながら、話を続けましょう。与謝蕪村は、絵画的な作風で有名。『其雪影』巻尾（高井几薫編、明和九年〔一七七二年〕、『天明俳諧集』〔山下一海他校注、新日本文学大系七三、岩波書店、一九九八〕所載）は、秀句集になっていますが、「春夏の部」の最初に、有名な句があげられています。

春のうみ終日のたりのたりかな　蕪村

これは、高校の古文の教科書に出てきますからおなじみですね。また、「書窓懶眠」（「書斎でだらしなく眠っている」の意）と題して、

学問は尻からぬけるほたる哉　蕪村

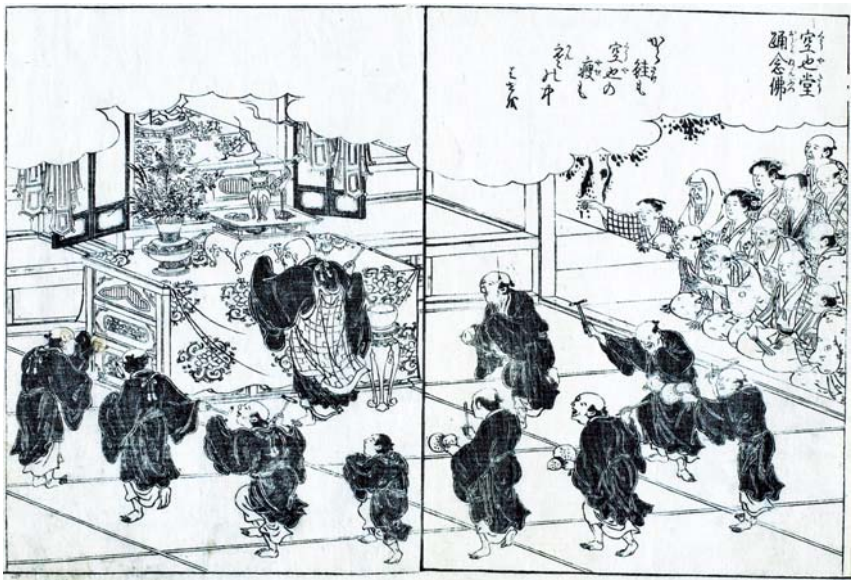
という軽妙な句も載っています。蛍雪の功も形無しですね。ついでに、小町（第4、5回参照）や夕顔（第7回参照）を詠み込んだ句を、同じ書物から。

雨乞の小町が果やをとし水　蕪村

ゆふがほのそれは髑髏歟鉢たゝき　蕪村

「雨乞の小町」は、小町が神泉苑で雨乞いをしたという伝説に基づいています。「をとし水」は、秋の田から水を落とすこと。小町が晩年に零落したことを「をとし水」にこめています。「鉢たたき」は、空也忌（旧暦十一月十三日）から四十八日間、毎夜鉦や瓢箪を叩き念仏を唱えながら京の町をめぐる行事（また、その空也僧のこと）。瓢箪は夕顔に似た白い花を着けることから、夕顔の花の果ては瓢箪。源氏物語の美しい夕顔の果ては髑髏。瓢箪を髑髏に見立てそれとなく、「この世は所詮はかないもの」と。

「鉢たたき」の実際の様子はどうかというと、うまい具合に、『拾遺名所図会』巻之一に「空也堂踊念仏」と題する挿絵が載っていますので引用します。確かに、鉦や瓢箪を叩き踊りながら念仏を唱えています。



『拾遺都名所図会』巻之一　空也堂踊念仏の図。
（国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用）

ちなみに、この挿絵の賛は、松尾芭蕉の句です。

から　鮭　も　空　也　の　痩　も　寒　の　中　　ば　せ　を

前述の『平安人物誌』の中に与謝蕪村も画家として載っています。明和五年〔一七六八年〕の版には、住所は「四条烏丸東へ入町」となっています。そのあとの安永四年〔一七七五年〕版と天明二年〔一七八二年〕版には、次のように記されています。

謝　長庚　字春星号三果　佛光寺烏丸西江入町　　与謝蕪村

蕪村の書簡集のなかに、宛名のない十一月二六日付の書簡があり、次のように認めてあります（返り点付与。振りがなは現代かな遣い）。

（前略）拙義左之所へ転居仕候。貴家へも咫尺に罷成候間、少々御入来奉レ希候。何事も貴顔之節可二申上一候。以上

霜月廿六日

仏光寺通室町東へ入南側ろじ

与謝蕪村

『蕪村書簡集』〔大谷篤蔵、藤田真一校註、岩波文庫三〇・二一〇・二、岩波書店、一九九二〕三五

「咫尺」は、「ごく近く」の意。この書簡の住所は、基準の十字路の取り方が違うだけで、結果的に『平安人物誌』の住所と同じ場所です。『平安人物誌』刊行の準備を考慮すると、遅くとも安永三年〔一七七四年〕には、この住所に越してきたことが、この書簡からわかるわけです。

ちなみに、本居宣長の師であった、武川幸順は『平安人物誌』安永四年〔一七七五年〕版にも同じ住所で掲載されていますが、一七八〇年に死去したので、次の天明二年〔一七八二年〕版には掲載されていません。堀蘭沢は、堀正亮（堀禎助）として、『平安人物誌』天明二年〔一七八二年〕版にも掲載されています。つまり、言いたいのは、本居宣長と与謝蕪村は、同じ時代の京都の空気を吸っていたということです。国学と俳諧、多少の分野の違いがあるとはいうものの、今の今まで気づいてなかったというのは迂闊でした。

■　山王社こと日吉神社

『芭蕉・蕪村』〔尾形仂、岩波現代文庫学術十五、岩波書店、二〇〇〇〕の中に、与謝蕪村が最晩年にどこに住んでいたか考証した、「蕪村の籠居」と題する一文があります。この文では、蕪村の住所について、上記よりもさらに詳しい検討なされています。その付図の中に、住んでいた路地のすぐ近くに「山王社」があることが記載されています。

その「山王社」というのは、日吉神社（室町通仏光寺下ル山王町）のこと。「日吉」と書いて、「ひよし」と読むのが一般化していますが、「ひえ」と読むのが古式。祭神は大己貴命、配祀は大山咋命と玉依姫命荒魂。

『拾遺都名所図会』には、「山王社」の項目があり、次のような記載があります。

室町五條坊門山王町にあり、總持院と號す。古は叡山の別院にして、傳教大師の勸請なり。祭神は國常立尊にて、本地藥師佛を安置す。毎年四月中の申の日、坂本山王祭 宵宮、未の日此所より七社の神供かずかず調えて、嚴重に列をつらね、まづ天台座主の御所へ捧げ奉り、御加持あつて、それより坂本の本社へ獻ず。これを未の御供と稱す。古よりの流例にして、今に怠慢なし。

「五條坊門小路」とは今の仏光寺通。江戸時代までは、神仏習合が普通でしたから、この神社も延暦寺の支配下にあったことがわかります。祭神は國常立尊となっていて、現在とは異なりますが、変った経緯はよくわかりません。

記載にある未之御供は、現在も「怠慢なく」おこなわれています。近江（滋賀県）坂本の日吉大社の山王祭は毎年四月におこなわれますが、その神事の進行表をみますと、未の日に、四社（牛尾宮、三宮宮、東本宮、西本宮）の神輿が宵宮場に渡御したのち、「未の御供献納祭」が宵宮場と西本宮でおこなわれます。このときに、京都市下京区室町仏光寺の日吉神社からの「未の御供」の奉納があります。この神事は、四基の神輿に生まれてくる御子神に、供物を奉るという意味があるそうです。このあと、「宵宮落し神事」という勇壮な神事がおこなわれます。ちなみに、坂本の日吉神社の祭神は大山咋命（東本宮）、鴨玉依姫命（西本宮）、大山咋命荒魂（牛尾宮）、鴨玉依姫命荒魂（三宮宮）。

■ 班女と繁昌神社

元の成徳中学校（平成十九年より、下京中学校に統合廃止）の向かいに、繁昌神社（高辻通室町西入ル繁昌町）があります。祭神は、市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命。もともと、「班女社」と呼ばれていたのを、「はんじょ」が「繁昌」に通じることから現在の名称になったと伝えられています。門前向かって右には、「高辻辨財天 繁昌の宮」と書かれた札が掲げられています。

繁昌神社

『都名所図会』巻之二には「繁昌社は高辻新町の東にあり、祭る所辨財天女なり。今眞言の僧これを守る。當社門前町の産沙神とす、祭は九月廿日なり。」とあります。

班女塚（高辻通室町西入ル繁昌町）は、長門前司の娘を葬った塚とつたえられ、繁昌神社の旧鎮座地とされています。現在は、小さな祠とともに石が一個祭られています。この祠の下は、井戸になっているらしい。

『拾遺都名所図会』巻一には、「元はん女社」の項があります。その説明には、

高辻通室町の西、北側人家の奥にあり。古此地にはん女の塚あり。今小祠を営み、鳥居を立て、額「半女社」と書す。此地に庭石かずかずあり。初めは畫工狩野氏の宅地なり。則今において江戸狩野榮川の持地とぞ。

宇治拾遺に曰く、

とあり、続いて宇治拾遺物語を引用しています。「元はん女社」が、現在の「班女塚」であることは、この説明からあきらかです。

『宇治拾遺物語』巻三・四七に載っている「長門前司女　葬送の時本処に帰る事」の一部を引用しながら、あらすじを紹介しましょう。

今は昔、長門前司といひける人の、女二人ありけるが、姉は人の妻にてありける。妹はいと若くて宮仕へぞしけるが、後には家にゐたりけり。わざとありつきたる男となくて、ただ時々通ふ人などありける。高辻室町わたりにこそ家はありける。父母もなくなりて、奥の方には姉ぞゐたりける。南の表の、西の方なる妻戸口にぞ常々人に逢ひ、物などいふ所なりける。

このあと、妹は、二十七、八で病気になって死にます。奥は手狭なので、妻戸口に棺を置き、葬るために鳥部野に運びます。着いていざ葬ろうとすると、棺はもぬけの殻。家に戻ると亡骸はもとの妻戸口に臥しています。翌朝、もう一度、念入りに棺を閉め、しばらく様子をみます。夕方にみると、蓋が細めにあいており、恐る恐るみると、棺はもぬけの殻。亡骸はもとの妻戸口に臥しています。さらに棺に入れようとしても、今度は根が生えたように動きません。仕方なく、妻戸口を壊して、塚を作って葬ります。住んでいた人も、気持ちが悪いので引っ越し、寝殿も崩れ果てて、だれも寄り付かなくなりました。

むつかしき事ありと言ひ伝えて、大方人もえゐつかねば、そこはただ塚ひとつぞある。高辻より北、室町よりは西、高辻表に六七間ばかり程は、小家もなくて、その塚一つぞ高々としてありける。いかにしたる事にか、塚の上に神の社をぞ一つ斎ひ据ゑてあなる。この頃も今にありとなん。

この話では、「高辻室町わたり」という地名は出てきますが、住んでいた妹の名前が「班女」であるとは書いてありません。一説によれば（『京都市の地名』所載。『雍州府誌』〔黒川道祐、一六八六〕を引用）、祀られていた弁才天（弁財天）は、針才女ともいわれるので、これが「班女」と転訛したと。正直にいいますと、これは、かなりのこじつけに感じられます。

あるいは、能の『班女』に由来するともいわれています。『宇治拾遺物語』の話と『班女』との共通点があるかどうか？　これは、いろいろ調べてみても満足できるような答えはえられません。『『宇治拾遺物語』の妹は、妻戸口で死ぬまで過ごし、死ぬときには男は通っていなかったこと。想像を逞しくすれば、男の通ってくるのを待っていて、死んでも妻戸口にいて待ち続けようとしたこと。『班女』と呼ばれた花子は、吉田の少将を待って、客もとらずに局に籠もっていたが、結局は追い出されて舞い狂ったこと。舞い狂いながらも、吉田の少将を待っていたこと。男を待ち続けるという鬼気迫る状況が似ているとして、『宇治拾遺物語』の妹を「班女」と呼ぶようになった」というこじつけはどうでしょうか。

「班女」については、別の言い伝えもあります。『改訂京都民俗志』〔井上頼寿、ワイド版東洋文庫一二九、平凡社、一九六八〕には、「繁昌社の水」の項があり、

伝説の上からみると、同社（繁昌社）はむしろその西の路地の突当りで、井戸の上に石をおき、その上に小祠がある地がもとである。神社では、石の下は井戸といい、近所の民家では池の跡といっている。班女社と称していたころの社の旧地で、醜女班女の君が世をはかなんで入水した跡であると伝えられている。京都の伝説名所の一で、古来この路地の前を婚礼の行列は通らぬ風習であった。

と記しています。そういえば、班女塚の小祠の下には、石組みがあり、どうも井戸であった形跡があります。この伝承に従うと、「醜女」がなぜ「班女の君」と呼ばれていたかの詮索をしなけれ

ばなりませんが、まったく手がかりはありません。

それでも、従来の説は納得がゆきませんので、もう一つ。屋上屋を重ねることになりそうですが、『拾遺都名所図会』巻一にある「額「半女社」と書す」から考えたこじつけ。和田英松著『官職要解』〔所功校訂、講談社学術文庫六二一、講談社、一九八三〕に「半物」の項があり、「召使のなかでも身分が高くもなくあまりいやしいものでもない中ほどの女」という説明があります。召使の女のことを「端女」と呼ぶことがありますが、これを「半女」と書いても、「半物」の例からまんざら根拠のないことではありますまい。「妹はいと若くて宮仕へぞしけるが」とありますので、妹を召使（「半物」⇕「半女」）とみなしてもよいでしょう。もっと想像を逞しくするなら、「妻戸口に住まわせた」というのは、姉が妹を召使並みにこき使っていたのかもしれない。ここから、「半女」→「半女」→「班女」と転じたという、もっともらしい説をでっちあげました。最後の「半女」→「班女」の過程は、多分、能の『班女』に影響されたもので、この転訛のために、由来が一層わからなくなったのでした、ハイ（と、ひとり納得）。

また、形容詞に「端近の」の語があり、「家の中の縁側や入口に近い所」の意ですから、『宇治拾遺物語』の「妻戸口」にも通じます。そこで、「妻戸口の女」→「端近の女」→「端女」→「半女」→「半女」→「班女」というのも考えましたが、最初の「端近の女」→「端女」の過程が強引ですね。ただ、最初の説の「針才女」→「班女」の転訛よりもましな気がします。

■　匂天神社、和菓子、そして仁丹町名看板

匂天神社は、高辻通烏丸東入ル匂天神町にあり、祭神は菅原道真。由来は不明。江戸中期には洛陽天満宮二五社の一つに数えられていたが、いまは小さな祠。写真でみてのとおり、ビルディングの壁に組み込まれて、気の毒な状態となっています。

匂天神社

『都名所図会』巻之二には「匂天神社は東洞院と烏丸の間高辻の北にあり、竹之辻子といふ、清香庵と號す。」と紹介されています。天神さんといえば、梅がつきもの。「清香庵」は梅の

香りにちなむものとおもわれますので、「匂天神社」を漢語にしたものかもしれません。多分「清香庵」と号していたのは、神仏習合の事実があったものとおもわれます。東京の亀戸天神の近くにあったという梅屋敷「清香庵」と関係があるのかもしれませんが、詳細は不明です。

ついでに、些細なことですが、この記事の中で、「烏丸」に「からすまる」と振りがなを振っているところが気になります。『都名所図会』では、ほかの箇所でも、「烏丸」と振りがなを振っているところがあります。たとえば、そのときには指摘しませんでしたが、本シリーズ第5回の「俊成社」のところを参照してください。『都名所図会』の著者秋里籬島は京都に住んでいたので、この振りがなは校正漏れでない限り正しいと思われます。現在は、「からすま」と呼んでいますので、この記述が正しいとすると、いつ頃から「からすま」と呼ぶようになったかという疑問がわきますね。それとも、「からすま」は単なる慣用で、現在でも「からすまる」と呼んでも誤りではないのか。それにしても、現在は「からすま」の読み一辺倒になっています。地名研究の立場から詮索する価値はありそうですが、たいへんにむずかしそうで、今回は避けて通りましょう。

匂天神社の祠の東に図子があります。第7回で紹介した因幡薬師を北へ高辻通に抜けると、その延長上に、この図子への入口があります。『都名所図会』巻之二では、竹之辻子と呼んでいるようですが、この名称は現在では忘れ去られています。この図子は、第4回で紹介した膏薬図子に次いで、仁丹の町名看板の宝庫です。なお、辻子は図子と同じ。『都名所図会』では「ずし」と読まず、「つじ」と読んでいます。膏薬図子も、『都名所図会』では、振りがな付きで「膏薬辻子」と表記されています。

高辻通から、この図子に南から入って、東に曲がりますと、東西部分の北側に、町名看板「高辻通烏丸東入上ル匂天神町」①が貼ってあります。植木の陰に隠れて、わかりにくいのですが、何とか判読できる角度で写真を撮ることができました。町名は、「匂天神町」。もちろん匂天神社にちなんでいます。

高辻通　烏丸東入　上ル　匂天神町①

さらに、北へ曲がりますと、南北部分の西側二階に、「佛光寺通烏丸東入下ル匂天神町」②の看板があります。ここも同じ匂天神町の町内。

佛光寺通　烏丸東入　下ル　匂天神町②

ところが、町名看板②の貼ってある町家の北隣、レストランの一階部分に、今度は「佛光寺通烏丸東入下ル上柳町」③の看

板があります。町名が変って、「上柳町」。この箇所が、匂天神町と上柳町の境界です。

さらに北へ進むと、東側の並びに、「佛光寺通烏丸東入下ル匂天神町」④の町名看板。この看板は、②と同じ住所です。

佛光寺通（ぶっこうじどおり）烏丸東入（からすまひがしいる）　下ル（さがる）　上柳町（かみやなぎちょう）③

佛光寺通（ぶっこうじどおり）烏丸東入（からすまひがしいる）　下ル（さがる）　匂天神町（においてんじんちょう）④

町名看板②と③は通りの西側、④は通りの東側にあり、向かい側で近いのは、町名の違う③と④。最初は奇異に感じましたが、両側町であるために生じた、変種の境界であることに気づいて納得。つまり、両側町の匂天神町と上柳町とは、南北に隣あっていますが、その境界が真っ直ぐでなく、変則的になっていること。これが、町名看板②～④の出現状況で、実地に示されているわけです。実際、地図をみると、その通りになっています。

最後に和菓子。この図子に高辻通から入って、最初に突き当たったところ、西側に音羽屋（高辻通烏丸東入ル上ル匂天神町）があります。創業大正十四年。名物は、「赤飯まんじゅう・白梅」。銘「白梅」は、もちろん匂天神に由来。赤飯を饅頭の皮で包んで栗を載せて蒸したもの。甘さ控えめの饅頭で、お茶なしでも食べられる上品な味。桜餅なども販売。

プロフィール
藤田眞作〔ふじたしんさく〕。一九四四年〔昭和十九年〕北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フィルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所（http://xymtex.com）を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第９回）2008/02/19
© 2007, 2008 藤田眞作 http://xymtex.com